

里山に手自然を創る喜び

NPO 法人苫東環境コモンズ

事務局 草 苅 健

1. はじめに

身の回りに緑なんてなくても十分生きていける…。日本人の多くはこころの底でそう思い始めている。そしてごく一部の人は、やはりホンモノの緑は心身の健康な生活に欠かせないと気づいている。林を利用しなくなってから、地域の身近な緑は存在するだけのものになったが、手をかけた雑木林などは、都市公園でなくともとても居心地のいい林であることに気づき始めた。そのような人が創り出す「手自然」は生き物のたちの棲むすき間を生み出している。これは定点にじっと関わり出せばすぐわかる。

2. 現場で行ってきた活動の内容

●これまで

とにかく、人が入り込む林は気持ちよく美しくなければ、市民の緑の「入口」「扉」にならない。これまでは、20～30ha 程の雑木林を借りて、「森林美」を追究した。丈の低い笹だったので小径（フットパス）を創ってみると、うつで悩む方なども喜ぶ雑木林の空間が生まれた。一方、四季を通じた日常的で危険も伴う単独の通年作業は、森林が潜在的に持っていたかも知れない宗教性の扉も見せた。

●これから

勇払原野の一角を占める苫東地域の土地所有者が緑地をもてあましている現状から、関係者と合意形成を図って活動域を広げ、もっと多くの人と雑木林や原野の保全と利活用を進めるためにNPO法人を設立した。土地所有者とは管理と利用の協定を結んで、そこに「環境コモンズ」の概念を重ねて、地域の宝「勇払原野」を地域住民が維持していく道筋を探っていく。これは所有者と利用者が乖離する道内各地域にも応用できる社会実験である。

3. 活動が生物多様性に与える影響

定点の雑木林を手入れし、観察し、建て物を建てると、そこは人の「依り代」としてだけでなく、思いがけない動物たちとシェアしているのが見えてきた。「昆虫層の多様性」も増したが、それは雑木林の密度管理が大きな理由だった。雑木林のガーデニングである。

4. これまでの活動の良い点、悪い点

雑木林の手入れは、ほぼ単独で行ってきた。小さな気づき（悟り）は静かな時間に初めて訪れるからだが、この点にこだわったあまり、大勢の市民と共にやる活動から遠ざかってしまった。ルール、マナーを創り守りながら、必ずしもグループ行動や社交を是としない、「人の時間使いの多様性」も加味して、成熟した「グリーンプレイク」を目指したいところだ。絶えず、営みを投入しないと手自然が維持できないことは、逆に手入れの喜びであり、根源的な動機になるが、社会活動として成立させるにはまだまだ工夫が要る。